



全国マルセ太郎中毒患者会
機関誌『さるさる』

さるさる

SARU SARU

第9号

2001年 1月 1日

発行：全国マルセ太郎中毒患者会

編集責任者 立木 寅児

〒201 東京都狛江市岩戸北1-7-9

協力：(株)プロダクション人力舎

TEL:03-3430-7328 FAX:03-3430-7531

E-mail:t-toraji@ra2.so-net.or.jp

発行所：スタジオBeフリー



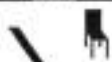
おめでとう、なんて言ってる場合か。
文句はあっても、新年はいい。
一年刻みで今年もしぶとく

マルセ太郎

へびは、なくよー



出前小劇場



マルセ太郎のライブ出前いたします。

出前持ち

内田直樹

内田事務所 ●〒151 東京都渋谷区代々木2-19-3 野崎花101

PHONE (03)3378-6458 FAX(03)3378-6582

芸人魂
マルセ太郎

既刊 芸人魂 ￥1800 講談社

既刊 奇病の人

マルセ太郎の本

講談社 ￥1800) ISBN-06-209195-X

病棟日誌

ここは、ファンの交流の広場です。どしどし投稿をお願いいたします。

趙博@大阪第2病棟です。

一昨日(昨年)の話、突然マルセ太郎が猪飼野へ出現しました。電話一閃! 「マルセです。今、弟のここにおるねんけど、今晚空いてるか?一緒にめしでも。」

空いてるも何も、仕事(河合塾のテキスト原稿書き)なんてうっちゃって出かけました。私と女房、娘の蘭水(なんす)は、豊鈴(ふうりん)という店に直行。豊鈴は、マルセママの弟さんの奥さんがやってるお店。

この女将が、また、昔からの知り合いで、特に私の義母とは「お寺で一緒に修行した」という深い仲。マルセ太郎夫妻、てつちゃん「勝治 on stage」夫妻、そして私たち。こんなライブは警沢の極みです。

てつちゃん「あの芝居はホンマよかった。ところで、最後の音楽、あれ、ホンマに兄貴やつたのか?」

趙「いえ、まあ、私がアレンジして、プロデュースはマルセさんです。」

てつちゃん「踊りも?」
マルセ「みんなわしがやったんや。わしが演出したんやないかい!」

「3回ぐらい、この同じ会話が続きました。てつちゃん、だいぶ酔ってきた。」

豊鈴は完全に「イカイノ物語」です。実は、てつちゃんと、私の女房の父(今年5月死去)は、同じプレス屋仲間です。昔からよく知っていたとのこと。義父の工場で働いていた職人さんが「きんばらプレス」に今もいる。女房は懐かしさの余り、ほろり涙をこぼして

「このひと、まるで一世なあ」「ういるせい! わしは朝鮮きらいじゃ、一世言うな。わしは二世じゃ!」
またまた大爆笑。涙と笑いと旨い酒。マルセ喜劇そのもの。店を出て、てつちゃんが娘に「おまえ、プレス屋だけにはなるなよ。」と言え、娘は「オマエちやう、蘭水や!」

猪飼野のガキは負けてまへん。なでしこ「コスモス on stage」行こ! てつちゃんは上機嫌。私は猪飼野の最も一般的な交通手段であるチャリンコに乗って、

先に車で行ってください。あとで追いかけますから! と告げ、5分後になでしこへ。マスター「久しぶり。夏の芝居以来ですなあ。」

趙「ご無沙汰してすまん。あれ、師匠と奥さん、それってつちゃん、まだでつか?」
待つこと10分。おかし、事故でも! と思いきや、二人が喧嘩しながら入ってきた。

マルセ「なんじやい、あの口のききかたは! 相手は年寄りの運転手やないか。道を間違つて教えんは俺や。赦さんぞ、オマエ。なんで弱いものをイジめるんや。ボケ・アホ言うて、運転手かいわいそに怯えとつたやないか。」

てつちゃん「なにもイジメてないやないか。どこ走つてんねん言つたんや!」
マルセ「嘘つけ! ここへ着くまでいじいと、オマエが運転手に言つた言葉、今ここでそのまま言つてみい!」
事情は飲み込めた。めちやくちやな迫力で二人とも言い合つてつちゃん「こいつだけは、いつもそうや。おまえの都合ええようにだけ言うな!」
ママ「もう、やめて。太郎さんも悪いし、てつちゃんもい!」
マスター「てつちゃん、ええ帽子かぶつてんのに、ミットもないで!」
てつちゃん「もう大阪に来な! 言うても来よんねん、このアホ!」
マルセ「自分の兄貴におまえとか、アホとか言つのはオマエだけじゃ。」
てつちゃん「マスター、この帽子やるか?」
これは一体何や? わたしや、近鉄劇場におるのかな? やつとこの辺から、日常会話に戻りました。

二人の間に座っていた私は、口げんかを止める気になれず、じつと劇をみている錯覚に陥りました。いや、ずるく「観察」していたのかも。マスター「カラオケでもどうでつか?」
マルセさんは「私のすべて」を歌い、てつちゃんは、やはり「人生の並木道」。マルセさんは「お答えして! 青葉城恋歌」。夢のような時間が過ぎて、1時過ぎに解散。別れ際にママが「イカイノ、是非、再演したい。絶対やるうね。」と熱いメッセージを...

帰ると女房が友達二人と飲んでた。我が家でもイカイノ&マルセ談義: 結局寝たのが朝3:00... 昨日は、その後遺症で何も出来ず...
精神にはきわめて良好な、そして身体には極めて悪い「中毒」症状です。
イカイノ再演!
猪飼野でなんとか、やりたいです。(昨年の正月のお話)

だんじょう@広島

広島公演「息子」は大成功で終幕しました。141のキヤパに160ぐらい入つて、笑いと涙につつまれてマルセさんが紡ぐ

「息子」の世界を楽しみました。どうやら、一番大声で笑つていたのは私のようにしたが、たぶん160人が160通りの「家族のあつたかさ」「恋人同士のさざめき」を感じた2時間だったと思います。

マルセさんは、声に張りがあった。「息子」のあの名シーン「ろうあの人で、なにがええでないか!」という台詞が、会場にひびいたとき涙があふれてきました。

ラストシーンで、三国が言う台詞「おら、幸せだ!」
それが、マルセさんの声に聞こえたのは中毒が重くなってきた証拠でしょうか。今日ほど、中毒にかかつて&そのウイルスが広島型であったことに感謝した夜はありません。

マルセさん、カンパニーのみなさんありがとうございます。



マルセ太郎のロードショー スクリーンのない映画館

96年12月シアターBeフリーにて収録のライブ版video (保存版)

- プロダクション人力舎 制作・発売: キメラ各巻 ¥4200 (税込み)
- VOL1 『泥の河』 カラー 78分 VHSステレオ Hi-Fi CHIV-111001
- VOL2 『息子』 カラー 100分 VHSステレオ Hi-Fi CHIV-111002
- VOL3 『生きる』 カラー 108分 VHSステレオ Hi-Fi CHIV-111003

株式会社 キメラ Tel03-5378-2711
Fax03-5378-2714 担当 伊藤
〒166-0003 杉並区高円寺南1-10-3 東京ビル1F

「マルセ太郎写真集」のお知らせ2 武居より

今日はマルセさんのお誕生日。一九三三年生まれなので六七才になります。おめでとごございます。マルセさんにも赤ちゃんの時代があつたんですよ。どんなだつたんでしようね。さて、写真集ですが、少々作業が、遅れております。申し訳ございません、もうしばらくお待ち下さい。

写真の方はレイアウトまで仕上がっています。当初より頁数は増え、約一四〇頁。独芸、訪韓、白州、喜劇、素顔、の5章で構成しました。サイズはB5弱です。本屋の写真集コーナーではなく一般書籍の棚で販売してもらいたいくこのサイズにしました。え、小さい？いえいえ、ご心配なく。いつものマルセさんが飛び出す絵本のように、迫ってきますよ。

タイトル、価格は只今検討中。マルセ太郎未経験者の方にもぜひご覧頂きたいので、2千円位の手ごろな価格に思っています。図書館にリクエストして下さるとのこと関係者一同、大変喜んでおりました。発売日が決まりましたら、一番にお知らせいたします。よろしくお願ひいたします。

「マルセ太郎菌」に感染した一部の名古屋の人々の笑って泣いてまた笑って、もつと幸せになるため YOKO

先日、甚目寺での「泥の河」を見に行きました。マルセさんはとても滑らかなしゃべりでした。また、涙がとまりませんでした。それよりも本日の用件は、こちら。帰りにマルセさんを名古屋駅までお送りした時のこと。場所は新幹線ホーム。もうすぐ67歳に手が届く

つかという初老の紳士を見送る、若い女性(私のこと、きゃー)

新幹線の扉のまえには、われ先にと乗り込もうとする乗客たちの列。女性は、「気をつけて、またお会いしましょうね。じゃ・・・」とマルセと別れがたい握手。

マルセ「じゃあ、ありがとつ。またな・・・。」という感じで、目で別れを告げていた。その後ろに、背の高いアントニオ・バンデラス似の男性が、同じように乗り込もうとしていた。アントニオ・バンデラス似の彼は、マルセの背中をたき、ウイंकを投げかけた。そして意味ありげに握手をした。そして「さしてこんどは私に向かつてウイंकをし、その手を上に掲げた。私はその手をたいて、微笑みながら握手をした。そして二人は車両に消えていった。さて、みなさんこの外国人男性のウイंकはどういう意味だったのでしょうか・・・いう意味だったのでしょうか・・・」

マルセさん「ぼんとたたいたそのたたき方と、やさしいウイंकがとても意味ありげだったんですよ。」

マルセさんもなんだかウイंकしてたんですよね。

ソウル便り 梨花 アンニョンハセヨ 皆さん、こんにちは。

マルセ太郎長女で、来春「イカイノ物語」に出演します、梨花です。今回はじめてメールします、それもソウルから、。9月18日から3泊4日で、マルセ太郎と行くソウルの旅という18名の団体ツアーとともにこちらに来て、彼らが帰ったあと、私は一人居残つて現

在、梨花女子大の言語教育院にて朝鮮語を勉強しています。

「ここに至るまでの経過を綴ると長くなりますが、心のなかくの思案期間は長かった割に、今回も出たとこ勝負で、いきなり学校に通うことに決めました。通常なら学生ビザを取得するために、学校からの入学許可書やら、こちらでの保証人やらを捜したりということをして、手続きを日本で終えてから来なければならぬようでしたが、現地できなかり決めても何とこのとはなく、現在に至っています。

すみません、これからが本題で、休刊中の「さるさる」に連載していた「ニューヨーク物語」に続いて、梨花の「ソウル便り」をお送りしようと思つたのですが、ここコンピュータ室の使用時間がきてしまったので、今回は挨拶のみで失礼いたします。

マルセと同じくたった一年のことなのに、前回来た時とソウルの印象が変わっています。

「若者」という言葉がびつたりだったあの、すがすがしいソウルの若者はどこへいつてしまったのだろうか？

然し、私の名前の由来である梨花女子大は本当にいい所で気に入っています。キャンパスの紅葉がきれいで、同じぐらいこの学生は美しく、歩いている姿に惚れぼれしています。

梨花、ぼれ、日本語読みでは「りか」ですが、こちらでは「Ewha」と発音します。

自己紹介をする時に、一度で聞き取ってもらったことはありません。自分の名前をきちんと発音できないなんて、ちよつと笑えます。

在日であくまで朝鮮語の読み方にこだわります。たしは呼びやすい方で構わない

と思います。日本では「りか」で、こちらでは「Ewha」で。漢字で書けば「こちらでは「Ewha」だから、それを無理に「りか」と読ませることはないし、その逆もまたしかりで。

第一、名付けたマルセ自身がきちんと発音できないのだから。(ダヨネ? パピー)

のぶご先生 立木

中央高速中津川インターから20分ほど走ると、旧街道沿いに古い家並みを残した過疎の町岩村がある。最初にきたときに「岩村」と言う「村」だともつていたら、「岩村」町なんだと後で知った。町に変わるとき岩村だと違和感を持つた人たちがいたんだらう。

近隣に、阿木、明智などあり、すべてライブをやっているが、岩村だけは続いている。毎回200人を越えるお客さんが集まる。過疎の村でこんなに続くのは珍しい。確か、初めての時、真っ暗な山の中の公民館ではたしてお客さんは集まるのかと不安に思つたほどの所である。それが、おんぼろの公民館にお客が埋まつたとき、その熱気に驚いて感動もした。「こんなに集まつたら、村中人がいらないじゃナインか！」などと主催者に軽口をたたいたのを覚えている。何せ、この岩村の主催者は明るくて、元氣なお年寄りなのだ。「岩村身障者の会」そしてその中心でおじいちゃんたちを大声で仕切っているのが、「のぶごせんせい」遠山のぶごさん、ここ岩村の小学校の先生。小柄で、目のぼつちりした、にっこり笑うとチャーミングな人だが、一見して学校の先生とわかる全く化粧つけない人だ。熱心なマルセファンで近隣のライブにはほとんどきて

いる。この「のぶごせんせい」が、四回も続く独演会の言い出しつべなのだ。ここまでは、いくつもある話であつて、こんな風にその土地と縁ができたところはいくつもある。しかし、ここが何か印象的なのは、ここにすむ人、その話なのである。

独演会が終わると公民館からほどない、町の料理屋(まあ、食堂と言つた方がいいかもしれぬ)が、こちらは何も反省しないわけではないが、「打ち上げ」を「反省会」と呼ぶところも結構ある。そう言うところははたいて「かたい」案の定、集まつたのは顔の真つ黒ないかに「村」の古老といつた人たちで、「こりや、もりあがらんぜ」と観念した。ひととおり、「おつかれさま」と乾杯がある。

音頭をとるのは元校長先生、マルセも小生もウーロン茶、内心「早くお座敷終わつて宿に帰つて、いっつぱいやりたい」と思つた。目の前のお重にはいつた食べ物もウーロン茶でもぐもぐやつていると、「のぶごせんせい」が「では、みなさん、自己紹介と今日の泥の河の感想を・・・」手弁当で手伝つてくれた人への配慮なんだから、こういう場合ほとんど成功しない。かたぐるしく儀礼的な雰囲気になるのがおちである。ましてや、先日、あるところではり全員に感想を求めた司会者にマルセが「しゃべりたい人だけ、しゃべればいいんで強制しないほうがいい、盛り上がりたければ自然としゃべる雰囲気になるんだ。それに、こんなに大勢いて全員自己紹介したら、僕勢のしゃべる時間がなくなつちゃう」とたしなめたばかりだった。「あちゃあー」

最初の老人が「私は身障の会

の・・・」ぼそぼそとしゃべり

お義理の拍手がばらばら、なんだか最悪のパターンになってきたようだ。二人目の老人の番になった。顔のでっかい目鼻立ちのしつかりしたひとだ。おおいのは顔ばかりでなく声も大きかった。

「わたしやーね、最初、マルセ太郎、いや、失礼、マルセ先生をです、失礼ですけど、しらかつたんですわ、それをね、このぶごせんせいがついて、い、ひとなんだ、ついでいうんですから、ね、このぶご先生が、わしやーね、最初、これだつたんですわ」といつて指をなめて眉毛をなぞってみせて「ほんとに、これだとおもつてたんですわ、それをです、このぶご先生が、あんまり熱心にいうもんだから、これ（眉唾）しながら、見てたんです、い、あやー、マルセ先生はすごい、ほんもの！」

マルセはこの話を喜んで、時々舞台でもしゃべっている。僕らの間では、まゆつばのおじさんで通っている。次は、小学校の元校長先生でながいさん、元校長先生だから町の子供たちのことは全部知っている。

「マルセさん、私はね、教師の悪い癖で、つい舞台より客席をみちやうんですよ、あーよく話を聞いてるな」とか、だれかよそみしてねーかって。そうしたら、あの布団屋のけんちゃんが一生涯懸命聞いてるんだな、あの布団屋のけんちゃんだよ。すると何人かの人が「へーあのけんちゃんか、と相づちを打つ。『そうなんだよ、あのけんちゃんか、あんなに熱心にきいてるんだから、マルセさんの話はすごいな』と思いた。』とにたく、岩村はマルセにとつててもいいお客のようだ。打ち上げでは今回もそう

がうれしそうにしゃべってる。「ここは、ほんとにめずらしいところですよ。たいていどこでもこういう催しの中心は女の人が多いんだけれど、ここはおじ（い）さんばかり……」

埼玉の患者、鴨澤みどりです。

父が予想通り正しい中毒患者の道を歩んでいます。

「枯れない人々」でアンケートを書いたとき、マルセさん自筆の葉書をもらったと大感激し、返事を出したようです。今日のシアターカイでの「生きる」は早い時間に行つて当日券を買ひ、補助椅子でしたが、（私）前の方の席で見ることができました。

忙しいので予測が立たず、前売券を買つことができませんが、来月も新年の連続公演も、時間があれば行くでしょう。実家に「芸人魂」と「奇病の人」二部作を置いてきましたので、そろそろ読み出すんじゃないかと思ひます。昨日の夕刊紙（？）にマルセさんのインタビュ記事が出ていたと、切り抜きを持っています。



人間屋を代表して一言 マルセ大郎

保守とか革新とかいうが、いまの日本にそんなものありやしない。

あるのはホンモノかニセモノかである。もつといえ、人格的に卑しいか卑しくないかである

と考える。たとえば、権力者、その周辺を取り巻く知識人といわれる人の中に、現憲法を改正して日本も軍備を持つべきだと（実際に持っている）主張するのが多い。それはそれで、意見として大きくはできるだろう。ところが彼らのほとんどが、「南京虐殺」はでつち上げだ否定するのはなぜか。こうなると意見でもなんでもない。ただの反動である。さらにいえば、憲法第九條があつても現実には軍備を持つてゐるのに、やかましく「改正」をあおることがあるからである。それは徴兵制だ。そのことを彼らは表面に出さない。そのうち出してくるのだから。

いま東京都知事の石原慎太郎の勢いが盛んである。彼の言動を見ると軍靴の音がきこえてきてならない。「おれは中国なんていわない。シナといつてどこが悪いんだ」とイキがついてる。まるでガキだ。そんな彼に「強さ」を感じて、百二十万も票を入れた都民にも絶望的になる。シナといつてどこが悪い？ 簡単なことじゃないか。相手が嫌だといつてゐるのだ。だつたらそう呼ばないのが常識ではないか。

若い人の中では、一九二三年（大正十二年）の関東大震災のことを知る人は少ないだろう。震災の混乱の最中に、軍人をもまじえた自警団とかいう暴徒に

よつて、左翼とよばれた人や、朝鮮人六千人が虐殺されたのである。朝鮮人が井戸に毒を入れたというデマが流されたのだ。誰がそんなデマを流したのか。僕はあえて言う。石原慎太郎みたいな奴である。だつてそのだろ。彼は言つたではないか。「もし東京に地震が起きたら、不法入国の三国人が何を仕出すか分からない。そのときには自衛隊に出動してもらいたは度し難い。」日本人のアジア人蔑視は度し難い。

しかしあの関東大震災のときに、立派な日本人がいたのである。僕も六年ほど前、エッセイスト朴慶南（パク・キョンナム）氏の著書「ポツカリ月が出ましたら」（三五館刊）で初めて知つたのだが、当時神奈川県警警察署長であつた大川常吉氏のことである。大川さんは、暴徒に追われて逃げてきた朝鮮人三百人を近くのお寺に保護した。棍棒など得物を持つた暴徒が千人も増え、彼らは朝鮮人を引き渡せと強要するのだが、大川さんは一歩も退かなかつた。毒を入れたという井戸水を持つてこさせ、それを飲んで見せ、どうしてもきかぬなら、

「おれを殺してからやれ」と体を張つた。勇気のある人である。おかげで三百人は無事汽船に乗ることができ、生命（いのち）を助けられたのである。そのときの大川さんの行為を讃えた碑が、戦後在日朝鮮人によつて建てられ、いまも鶴見区の東漸寺（とうぜんじ）にある。きけば二、三年ほど前、亡き大川常吉さんのお孫さんが金大中大統領の招待をうけ、祖父への謝意を送られたそうである。

戦後歴史学は「自虐史観」であり、それでは日本人の誇りが持てない、侵略戦争を否定した教科書をつくりつつある西尾

幹二や小林よしのりに一言いた。大川常吉さんのような人物こそは日本人の誇りとすべきであり、決して東郷平八郎や東条英機ではない。言つてもムダか。

われわれのような権力から遠い者は、一人ひとり無力かもしれない。しかし野球にたとえれば、せめて良き外野席の客になることはできるだろう。歴史をしつかり見よう。世の中には、少数派ではあるが、常に弱者への視点を失わないで闘つている勇気の人がある。彼らを孤独にさせてはならない。外野席からでも拍手を送ろう。『街から』のようなミニコミ誌なら、それができるはずだ。

本間健彦 編・著 『人間屋の話』（街から舎）
「地方・小出版流通センター」取り扱
書籍コード ISBN4-939139-02-6 C0095

